

「ヘルセポリス」と「スーサ」

足利 惇 氏

一、「クローロス」の陵墓

余が「ベヒスタン」(Behistan 又は Bizutan)の碑文の中に、所謂、パールサ(Parsa)、即ち、今日で云ふ「フアルシスターン」(Farsistan)の地に入つたのは、昭和九年十一月で、「イラーン」高原は漸く雨季に近づき、波斯の碧空にも、雨を孕んだ雲が、漸く狙徠する時であつた。「エズド」に於ける拜火教の現況(史林第二十一卷第三號小稿参照)の視察を了へ、「シール、クーフ」(Sir Kuh: 獅子山の意)の南麓に沿ひ、「カギール」(Kari)の大沙漠を横断して、「イスバハン」(Isfahan)「シラーズ」(Siraz)間の本街道に出で、更に南下して、「デーヴィド」(Dehvid)の寒村に於て、更商宿(Karabansari)に、旅愁と不眠とに悩みつゝ一夜を

「ヘルセポリス」と「スーサ」

過した。翌朝南下すること更に六十料にして、「メシヘッド、イ、モルガーブ」(Meshed-i-Mughab)、即ち、古代波斯の所謂、「バイシャウワダー」(Paisyavada)(此の名稱の語根に就いては尙議論の餘地あり。)又は、「パサルガダ」(Pasargada)(波斯の傑)の地に入つたが、これより有名なる「アケメニード」王朝の高祖「クローロス」(Kuru; Kuros)の陵墓に達するには、本街道より五料西に入り、「ボルブル」河(Peyvar)を涉らねばならぬ。其處には純白の大理石で積重ねた臺上に、破風造りの小室がある。この墓こそは、西暦紀元二世紀に出でた希臘の史家「フラウィウス・アリアン」(Flavius Arrian)の著書「アナキシス」

第六卷第二十九章の記事と全く符合するものである。

Flavii Arriani Epitome Historiarum, lib. VI, c. 29, par. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100.

επιθου ταίριον... αντρω οε τον ταίριον τα μετα χρισου λισου περιπερισσο
 ες περιπλανων εν τω περσο, πολω. ερωσιση οε ατρωρα εστειρα λισου
 ερετασπερος, δουλα εχου κεπατραν ελαω στινιη, ες λυδω ειν εν
 αναγι ον περσο, εκλακ κωκωκαδωσπι ταγαλιετω.

(かの「クローロス」王の陵墓は、「バサルガゼ」の地に於て、王の庭園たりし所に存せり。……而して、陵墓は、その角切の石もて四角形に造られたり。上には石の屋根ある室ありて、これに通ずる戸口は極めて狹窄にして、一人然も小さき人が、辛じて、且つ大いに辛苦して漸く其處に入り得る程なりき。)

然し、この「クローロス」王の陵墓は前掲「アリアン」の記載を見て明白である如く、到つて粗末なもので、果して、「アケメニード」王朝の高祖「クローロス」王の墓であつたか、はた同名異人の墓であつたかは、近代史家の間に以前から問題であつた。この「バサルガゼ」の地は、最近「ヘルツフェルト」(E. Herzfeld)氏が、米國考古學團體の後援で、其の發掘に従事した結果、「クローロス」の像と稱せらるゝ彫刻の上部にある有名な刻文、

Adam Kurus xšayrōiya Haxmamišiya.

(我は「ハッカーマニ」家の王「クローロス」なり。)

について論じて、この碑文を以て建築物に對する碑銘な

りと斷じた。その論斷の理由は、先づ第一に、碑文の劈頭に人稱代名詞單數第一人稱である「adam」がある以上、例へば、「ヘルセボリス」に於ける「クセルセス」一世の碑文に見えるやうに、「akunavam」(我は造れり。)(の如き動詞が、その文句の末尾に來る可きものと見ることが出来る。第二には、この碑文は、「ダリウス」大帝や「クセルセス」帝の碑文中に見える稱號である「xšayrōiya xšayrōiyānam」(王者の王、梵語ならば、「ksatriyah ksatriyanam」)の如き、「メディア」(Media)式の尊稱を缺いて居るが故に、この刻文彫刻の時期は、「クローロス」が未だ波斯の大帝國に君臨せざりし以前、即ち、邊境「アンザン」(Anzan)の一王(xšayrōiya)で、未だ大王(xšayrōiya xšayrōiyānam)にならなかつた時代であつたことが明白である。第三には、この「xšayrōiya」の語が、古代波斯に於て、一地方の王、藩王の觀念を示すことは、古代印度に於て、「raja」が必しも霸王(adhivā)の如き皇帝を現はせざるのと同一軌である。第四には、その碑文には、一方に於いて、その文に對應する「バビロニア」及び「エラム」語の碑文があ

るが、それには、「ハッカーマニ」家の大王「クローロス」と書かれ、前掲の波斯文にあるが如き、人稱代名詞單數第一人称を缺き、且つ、大王となつてゐる。されば、この「バビロニア」及び「エラム」語の文は、「クローロス」の肖像に對する説明文であつて、決して波斯文の如く、建築物に對する碑銘ではないことが明白である。第五には、この「バビロニア」及び「エラム」語の碑文には、「バビロニア」式の尊稱を更に缺如してゐる理由によつて、「クローロス」が「メデア」帝國と同盟して「バビロン」を占領せる以前の碑文であつたことも自ら明白である。この五個の理由から推論して、「クローロス」王の「ペサルガデ」の造營は西曆紀元前五百五十九年から五百五十年の間であると述べてゐるが、至極尤もな説であると思はれる。「クローロス」王の陵墓の型式が、他の「アケメニード」王朝歴代の帝王の陵墓の型式とは大いに異り、雪の如き純白の大理石を積重ねて造つてあるその型式の系統は、埃及、又は希臘の先住民「ペラスギ」(Πελασγοί)族の建築様式に屬してゐることは、誰人も異論のない所であるから、此の堡

「ペルセポリス」と「スーサ」

砦の造營は、「クローロス」王が未だ帝國を建設せざりし以前の事であつたことを、否定することは出来ない。「ペサルガデ」所在の地形は、恰も京都の近郊なる大原の郷を數十倍に擴大したやうで、四面は山に圍繞せられ、その中を「ボルブル」河の清流が南に向つて走り、平野の極まる所が溪谷をなしてゐる。道路は略々南北に通じ、南は「ペルセポリス」に向つてゐるが、新道は主に河の東岸に沿ひ、舊道は主に西岸に沿ふて居る。「モルガープ」より「ペルセポリス」、即ち、「イスタフル」(Istakhr)迄、距離約八十軒(邦里約二十里)を有するが、「ペルセポリス」の二十軒手前に、山の迫つた小村の丘には、「ペルセポリス」風の石柱が峙立して、其の礎石の完全なものの多數あつたのを望んだが、「不知何王殿」と云ふ感慨を起しながらも、道程の都合上精しく踏査することは出来なかつた。十一月の半ばとは云へ、南方波斯の太陽の光は春の如く暖かに、上代波斯文化の香り、既に近づけるのを感じしめた。

第二十二卷 第三號 五七九

二、「ナクシュロスタン」の諸陵墓

更に南進すると、「ベルセポリス」の手前三料の處から西方に、大きな岩山の絶壁を利用して造つた有名な「ナクシュロスタン」(Nagsh-Rustam)を認めることが出来る。余は旅行の都合上、是を歸路に見學したが、本道から見れば指呼の間にあるに關らず、いざ間道に入込むと「ボルブル」河の徒渉所を選ぶ爲めに大迂回をせねばならぬ。距離十六料を算した。而して、この「ナクシュロスタン」の岩山は、「ヘサルガヂ」の方から續いて來た岩山が、一旦「コ」に盡きて、「ベルセポリス」の大平原である「メルヴダシュト」(Merwaddsh)に續かうとする所にある。稍、赤色を帯びた岩山の絶壁には、三個の長十字型の陵墓と更にその北側に於て、南面した未完成と思はるゝ他の同型の陵墓とがある。是こそ、嘗ては空前の大帝國の皇帝たりし「アケメニード」王朝の三代の主、「ダリウス」二世(Daravavus; skt. *Dharavavasu)、「クセルセス」一世(Xsaryāsa; skt. *Kṣaya+īśabha)、「アルタクセルセス」一

世(Artakshata; skt. *Ita+ksata 正しき統治者)の陵墓であり、向つて「ダリウス」帝のは中央に、「クセルセス」帝のは左方に、「アルタクセルセス」帝のは右方にある。「ダリウス」帝の陵墓の上方には、所謂、古代波斯語の「ナクシュロスタン」の碑文として知られてゐる刻文が、仰いで纜かに肉眼に認めることが出来る。これらの陵墓の下は舊道であるから、旅行者は必ず是等の陵墓を仰いで禮拜した筈である。陵墓の最も低い處でも、路上から十米程であるから、到底登攀してこの陵墓の内室に入ること出来ぬ。これら陵墓の下の岩壁には、是亦有名なる「サッサーニード」(Sassanīd)王者の王)王朝時代の彫刻及び碑文が鮮かに認められ、中にも「シャール」(Šāhr. 王子の義。A. D. 241-272) 帝が羅馬皇帝「ヴァリアン」(Valerian)を擄にして、馬前に降を乞はしめてゐる圖があるが、中古の波斯帝國の歴史に於て、其の黄金時代である薩珊王朝の史實として、「イラン」民族の最も誇とするものの一つであらう。然し、これらの紀念す可き諸々の彫刻の浮彫も、多くは半ば土砂に埋れて

居るから、上古の「アケメニード」王朝の三帝の陵墓は餘程高所に造られたものと考へられる。上古「アケメニード」王朝の功業は勿論、中古の「シャープール」大帝の功業すら、後代「イラーン」民族の記憶の中に失はれたと見え、何時からともなく、これらの諸像は、「ナクシュロスタン」と云はるるやうになり、又同時に、この地名を指すやうにもなつた。即ち、近代波斯語で、「Nagsh-e-Rustam」とは「pictures of Rustam」又は「images de Rustam」と云ふ意味で、「ロスタン」の名は、昭和九年十月國費を以て千年週祭の行はれた波斯第一の叙事詩人「フェルドウシイ」(Ferdousi)の大叙事詩「シャフナーメ」(Shahnameh)中に出てくる、「イラーン」に於ける神話時代の英雄の名で、その勇武と悲しき戀とに就いて、詩人「フェルドウシイ」は、美しき詩藻をもつて歌つてゐるが、非常に「イラーン人」に愛好せらるる名前である。この「ロスタン」の名は「rus+stam」に分解出来、「rus」は「クルヂー」(Kurd)の方言で「黒」を意味し、「stam」は梵語の「sthana」に相當して、「勢力」を指し、勢至菩薩などの

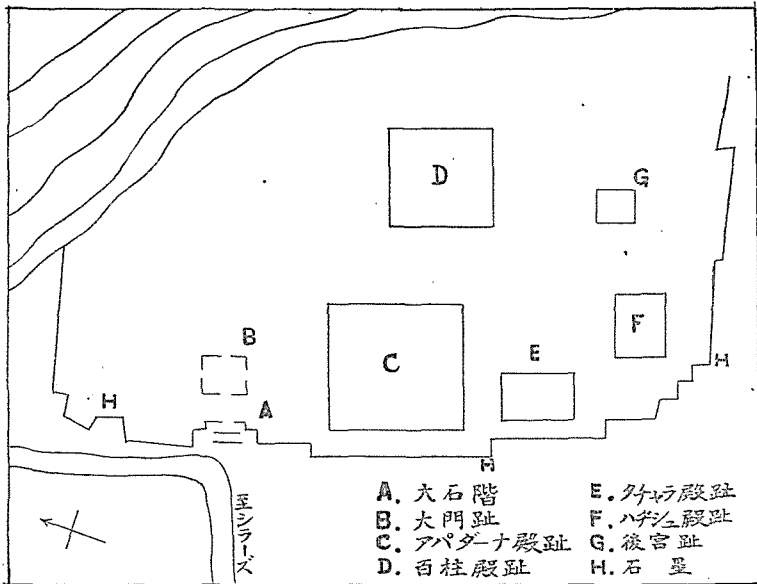
「勢」は即ちこれである。黒の字が「黒色」「醜惡」を意味すると同時に、「多」とか「強」を示す言葉であることは、邦語で「鬼」や「惡」の字が、凶惡と同時に強しと云ふ意味を示すと同様である。鬼將軍とか、惡源太など云ふ名稱を見れば自ら明白である。

此等陵墓の前に、廣場を隔てて、今日、人の云ふ「カアバ」(Kaaba)と稱せらるる四角い石造の塔狀の建築物がある。これは勿論「メッカ」の都にある「カアバ」(四方石)の「アラビア」語に相應するが、是と關係のないことは明白で、上代に關する記憶の失せた回教的波斯人が、勝手につけた名である。この建造物が何に使用せられたかは現在尙ほ疑問であるが、少くとも拜火教のもので、帝王の陵墓に關係のあつたことは想像され得る所である。

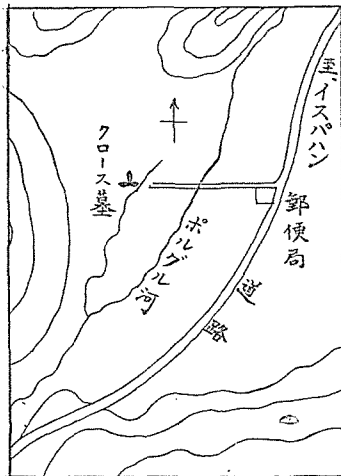
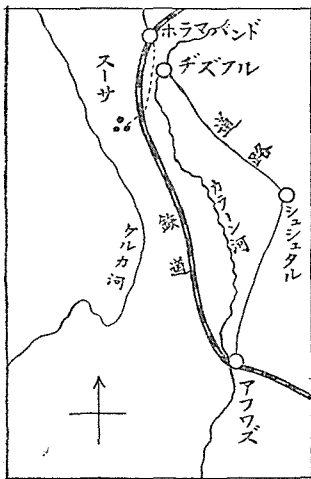
三、「アケメニード」王朝

の宮址と陵墓

ナクシュロスタンより本街道を更に南下すると、今迄の「ポルブル」河の谿谷から急に視界が開け、所謂「メル



スーサの位置



「ベルセボリス」の平原が展開して居る。直ぐ東の山麓が「ベルセボリス」(波斯の都城)の遺跡であり、所謂、中世波斯の「スタフル」(Stakr)、今日で云ふ、「タフテ・ジャムシム」(taxt-i-Jamsid; throne of Jamsid, ジャムシッドは「輝けるヤマ」の意)が見える。林立してゐる廢址の圓柱も、四圍の風景が廣大無比である爲め、實に少さく見えたが愈々近づいて見て、その巨大なのに一驚を喫した。道路はこの廢址の大石階の下迄來り、それより右折して、この「メルヅダシュト」の大平原を横斷して、四十軒を距て「シラーズ」の町に至るが、「ベルセボリス」は後ろに「ク

ーヒラフマツト」(Kihirahmat, 即ち、恩寵の山)を負ひ、古代波斯「アケメニード」王朝時代の宮殿の石壘は西南に向つてゐる。長さ約四百五十米、幅の最も大なる處は約三百米を有し、大體の形は矩形をなしてゐる。石は黒灰色の花崗岩で、石壘は一番高い西南隅で、約十八米あり、最も低い處でも八米を算する。是ら巨大なる切石は凡て石壘南壁、「ダリウス」一世の碑文にあるやうに、「ダリウス」一世の事業である。

「ベルセボリス」と「スーサ」

byā durvaṣṣam syātiḥ axšāta hanuvcy
Amrā niraštīy abiy nām vīdām
(實に永劫に慶福が「アフラ」の大神によりて、この宮居に障礙なく到る可し)

大石階は稍々西北寄りの前面に在る。所謂「ベルセボリス」式と云はるるもので、向つて石階が左右に別れ、中段のおどり場から更に折れて登り、上方で一致する型式である。石段の數、百十一あるが、一段一段の距離は甚だ低く、且つ全體の傾斜は緩やかであるから、軍馬や甲兵の昇降も容易であつたであらう。この石段を登り詰め、た所に大門の跡がある。その四個の大門柱の西側には、一對の大なる水牛、東側には一對の人面有翼の水牛で、古代「アッシリア」の「ラマス」(Lamasu)と稱する通路を司る神靈の型式を採つてゐる。その南方の門口には、門が開閉せられたらしく、石上に戸の擦れた痕が認められる。「ベルセボリス」の石造建築物は、この大門柱に限らず、凡て一度炎上したことは、その石質の變化より推して、誰人も直ちに判る所である。余は波斯考古學の權威である「ヘルツフェルト」氏を此處に訪問した。氏は、此

の廢址の東南方にある古の後宮のあつた跡を利用して、研究所を構へて研究に餘念がない。氏は冬を除いて殆んど凡ての季節を通して、人煙の絶えたこの地に、發掘と研究とに心を傾け、その立派な業績は斯學に従事する者のつとに欽尙する所である。氏は余の訪問を喜んで迎へ、最近の發掘物に就いて注意す可きものに、自ら説明をして呉れた。その第一は、雁の首の模様のついた裝身具を發見したことで、これは古代波斯の文化が、遠く北方文化と連絡のあつた一つの證明となること。第二、「クセルセス」帝の「アバダーナ」殿(abadana)の東側、階段の下を發掘中、多數の楔形文字の土板を發見したことで、目下未整理中なるも、これを判讀し得たる曉には、現今限られたる古代波斯語の語彙の數に、少くとも百以上の新語彙を増加し得可きこと。第三、石壘の下、道路を隔てて西北方と西南方とに古代の町が存在してゐるが、西北方の都市の趾を發掘中、約十五種に約二十種計りの石塊を發見し、その斷面の摩擦面上の楔形文字は未だ研究中に屬するも、恐らく「アエスタ」經典中の「ヤシント」(Yasno)

の一部らしく、若し然らば、古來「アケメニード」王朝の世に「ゾロアスター」教、又は同系統の宗教が國教たりしことは、同王朝の碑文に「アフラマズダ」の神名が出てゐることを以てしても、大體推知し得るが、所謂、楔形文字の古代波斯語で書かれたる「アエスタ」經典は、今日迄一つも發見出来なかつた故に、こゝに始めて楔形文字で書かれた「アエスタ」經典の一部の存在を示すわけである。是は非常な大發見で、又興味あることである。第四、同じく西北方を發掘中、希臘文字で書かれた人家の標札らしいものを發見したことで、「ΑΡΤΥΝΙΔΙΟΣ」とあり、その文字の書體の古さからして、西曆紀元四五世紀頃の小亞細亞の古代希臘植民地より出土のものと同様の點があることである。第五、多くの發掘物中、「ペルセポリス」の宮殿からは、未だ管て、婦女子の裝身具と覺しきものを一つも發見せざること。又、女の像はなく、獅子の像にても牝はない。是は埃及や「アッシリア」の遺墟發掘に比して大いに相違があり、又、興味あること。第六、三年程前に西北方及び西南方發掘中、現波斯王室收藏の黃

金の石板を發掘し、これによりて、「ペルセポリス」の古の境域を知ることを得たること等につき、實物を示しつゝ説明を受け、非常に興味を覺えた。氏は又「ペルセポリス」の南東方にて、有史以前の染付陶器を非常に澤山發掘し蒐集してゐた。

四、歴山大王と「ペルセポリス」の宮殿

リス」の宮殿

これらの話を聞いてゐる間に、波斯の秋にあり勝ちな天氣の急變となり、嵐が來て、暫く外部の見學を中止せざるを得なかつた。灰のやうな軽い土沙は地上を走つて地面の凹所をたちまち埋めてしまふ。廢址發掘の地下約三米には黒い灰の層があり、是が雨に浸み出てゐるのを見た。例へば、史家「アリアン」の書中にあるやうに、「アレキサンダー」大王が、嘗て希臘本土に侵入せし波斯人の報復の爲めに、宮殿に火を掛けたか否かは別として、「ペルセポリス」の宮殿が炎上したことは、諸々の建造物の石質の火による變化を認める以外、これが有力なる證

據である。

Sarpatruu uev õh Ilegauv xarétotipe q'paorádehne tob' T'roullipou naíta. ta paarlíma de ta Ilegraia eperíthos, Iliapustíouos oúdeu xup'pouk'vúptros, tá re álax (xal) éri oú xalúv a'roú x'fíq'pata q'õn an'álupoi, xal éri oúv :stavros p'poteúouvti av'ç: oi xarà t'p'v 'Avlíou av'p'p'õv, é s' oúde av'ç: épyovúvri xar'éyeu t'ç: 'Avlías t'p'v aq'ç'õv, álla ék'áléiv muov vvaúvta. 'o de t'p'p'ouq'p'ouata ék'áléiv Hépatos éq'uorxev av'p'ç'õv éri t'p'v T'álaxia éúvovtes tás re 'Alhvas xarétovav x'p'v xal tá íepa eperíthov, xal íota álax xarà tois 'Eúalhvav éq'v'p'p'ouvtov éq'ep' toúrov díxas áq'p'ç'õv. (III. 18)

〔二方に於ては「ペルス」の地の方伯(Satrapas; skt. ksatrapa)として、彼(アレキサンダー)は「レオミトリス」の子、「アラサルテス」を任命せり。然るに彼は「メルシア」の宮殿を燒けり。「パルメニオ」は彼(王)に宮殿を火より救はんことを請ひ、且つ、特に論じて曰く、今や王自身の財産となりしものを破壊することは不可なり。又若し、王にして「アツア」の支配權を充分に掌中に收めずして、單に勝利にまかせて、「アツア」の中を通過せんことを志し居るが如く「アツア」人をして思はしむれば、彼等は進んで合體するに到らざる可しと。然るに彼は、希臘侵入に際し、その犯したる所行、——「アテナ」の破壊、諸神殿の燒却、又、彼らの希臘人になしたる一切の慘虐なる行爲の報復の爲めに、波斯人を罰す可き、と提案すと答へたり。〕

Ἰνδῶν δὲ ἐς τὰ βασιλῆα γῆ τὰ Πέρσων, ἃ οἱ τοῦδ'Ἰνδῶν βασιλεὺς ἀνέδει...
(Id. XI. 30)

「それより、彼(アレキサンダー)自ら、嘗て彼の焼ける「メルシア」の宮殿に進軍せり。」

「メルセポリス」の宮殿の後方、山の中腹には、三つの「ナクシユロスタン」型の陵墓がある。即ち、アルタクセルセス二世(B. C. 405—361)・アルタクセルセス三世(B. C. 361—338)・ダリウス三世(B. C. 336—330)三代のである。「アリアン」に據れば、

Ἀλιανὸς δὲ τὸ πρὸς τῶν Δαρείου ἐπὶ Πέρσας ἐπιπέδῳ οὐδὲν ἀναίσιον ἐν ταῖς βασιλευσὶν ὕψους, καθάπερ καὶ ἐν ἄλλοις ἐπὶ Δαρείου βασιλείᾳ. (III. 22)

「アレキサンダー」は「ダリウス」の屍體を「メルセポリス」に向け發送し、「ダリウス」の以前の他の諸王の例に従ひ、王者の屍骸に置かんことを命ぜり。

とあるが、「ダリウス」三世の陵墓は未完成である。

「ヘルツフェルト」氏の研究室の窓から、雨に曇る「メルダシエト」の野を眺めたが、謂はゞ、山の中腹に在る宮殿の一部をへ三米も地下に埋れてゐるのを知れば、この平原の中に、いまだ何れだけのものが埋れてゐるか

判らない。曠野の中に於て、これだけの壯麗無比の宮殿のみが忽然として存在し、是に附屬せる市街、或ひは寺院等が缺如してゐる理由がないと思ふ。西暦紀元前五百年頃、「ダリウス」二世が建設し、「アレキサンダー」大王に焼かれる迄、少くとも約一七十年間榮えた「パールサ(Parsa)の町の發掘は、僅かに其の緒に就いた計りと云はねばならぬ。雨が休み、日光が射出したので、「ヘルツフェルト」氏の研究室を辭して、百柱の宮殿(Sad Shihin; Katrovisho)を見た。この宮殿は、種々の儀式を行つた所であると云ふ。破壊の痕著しいが、規模の廣大であつたことは、礎石の位置の間隔から測定し、それを復元して見て想像することが出来る。大門の跡の南は、即ち、「クセルセス」二世の宮殿「アバダーナ」殿の遺趾のある所で、此の宮殿は主として、波斯皇帝が政務を見る時、又は諸侯藩王の引見の際に、出御した所である。其の結構は巍々として、且つ、壯麗を極めたことは、今日からでも充分想像出来るが、何故に、斯る宮殿を「アバダーナ」と呼んだか、その名稱由來の問題になると、何人も未だ満足

す可き説明を與へたものを見ない。

五、「アバダーナ」殿の結構

「アバダーナ」殿の石臺の側面に沿ふて有名なる浮彫がある。「クセルセス」帝當時朝貢した歐亞の諸民族が、それぞれ特長を失はずに現はされ、長年月風雨に曝されたのに關らず、その正確なる彫刻の痕は驚くばかりである。

二つの峯のある駱駝を引くは「バクトリア」人 (Bactria)、大斧を肩にせるは印度人 (India)、又は、頭に布を巻ける「アラビア」人 (Arabia) 等は直ちに是を知ることが出来る。菊の模様を盛んに用ひてゐるのや、「アバダーナ」殿の北面の兵士の浮彫は、如何しても「アッシリア」の藝術の影響を外にしては考へることが出来ないが、これだけの巨大なる材料を用ひ乍ら、余をしてむしろ繊細なる感をこれらの彫刻物から受けしむるのは、確かに「イラーン」的な美術の特長と云ふことが出来る。殘に自然物の模様化と、その應用の妙は、是亦波斯人の特技の一つと考へられる。「ベルセポリス」に残存せる石柱は、希臘、

殊に小亞細亞の希臘美術の影響を多分に受けて居ることは、一見して判明する所であるが、その柱頭の裝飾に花模様を配したり、或ひは「エラム」風の水牛の頭を雙つ並べたりしてゐる點は、餘程東洋風に近い。石柱の礎の部分の裝飾も、好んで印度の佛像に見るやうな連瓣風の模様を現はし、柱全體は非常に軟い感を與へる。而してこれら石柱による波斯建築の特長は、規模や材料、又は時代の差異こそあれ、「イスバハン」の「アバース」(Abbas) 大帝の宮殿たりし四十柱 (Chin Summ) の宮殿に、その明かな系統を觀取することが出来る。獅子が水牛に噛みついてゐる浮彫は有名であるが、これは「アバダーナ」殿北面の階段の下にある。是らは凡て左右相對に造られ、宮殿美術として均衡を失はないやうに努めてゐる。こゝに問題となるのは、これら浮彫の人物中、「アバダーナ」殿東側の石段を登つた内側の正面の處の部分が、未完成であることである。善美の完全を期す可き宮殿建築に、而も最も人目に立つ正面の個所に、未完成の人物彫刻の存在することは、實に不可思議と云はねばならぬ。

「ヘルツフェルト」氏は、これを説明して、波斯人の性質がその大事業をなすに當り、決して終りを全うすることなきことを擧げ、この「ベルセボリス」の宮殿さへ、未完成の儘、放置したのではないかと疑つてゐる位であつた。然し、余の考を以てすれば、かゝる「アバダーナ」殿の未完成の部分は極めて僅少で、見るものが、よく／＼注意して見ねば氣付かぬ位であるから、此の未完成は有心故の未完成であつて、所謂「滿つるを嫌ふ」と云ふ東洋風の宗教的感情の結果であると云つてよい。今日でも、波斯に於て、非常に華麗な絨緞に、強いて異色の緯を織込んだり、又一寸した缺點を造してゐるのは、即ち古代波斯人の性質を示すもので、支那流に云へば、滿は損を招くとか、高明は神惡に通るとか云ふ宗教心の發露ではないかと思ふ。

六、「ダリウス」大帝の冬宮

タチヤラ

「アバダーナ」殿の南は、「ダリウス」大帝の宮殿「タチヤラ」(Tachara) であつて、「ダリウス」帝が立ち、波斯印

度に於て、王位の象徴である塵尾(拂子)を持つてゐる侍者の侍立してゐる浮彫や、「ダリウス」帝の王座を諸民族が支持し、帝像の上には「アフラマズダ」の神影が閃めいてゐる浮彫等は、皆この邊にある。「ダリウス」帝の腕には、嘗て金環がはめてあつたと見え、腕の上部には溝の痕があり、又、これらの彫刻物が凡て丹青の極彩色のしてあつたことは、深彫の深部、風雨の到らない處にある顏料の殘滓によつて推知することが出来、又、土間は丁度「ボムベイ」の廢墟に見るやうな赤色の漆喰塗であつたことを知ることが出来た。即ち、丹堽丹庭である。「タチヤラ」殿の窓の縁には楔形文字の刻文がある。この宮殿は「タチャラ」と云ふが、近代波斯語の「تاج»に相應して「冬の宮殿」を意味する。東南隅の宮殿の廢墟は、「ハヂシ」(Hajis) 便殿と云ひ、その下は古の庭園であつた。「ベルセボリス」の宮殿の結構は、現在の廢墟より推して壯大無比と云ひ得可く、秦の始皇帝が造營せしめた咸陽宮は、楚人一炬の下に焚き盡されて、今日其の結構の委しきことを知るよしもないが、「ダリウス」大帝以來、歐

亞爾大陸に互る二十四の諸民族、百二十七國を朝貢せしめ、其の富と技術とを集めて造營した波斯の盛時の建築は、六國の富と技術とを集めた咸陽宮の結構とは到底同一の論ではなかつたことと思ふ。秦の始皇帝が、果して「ダリウス」以下列代の「アケメニード」王朝の帝王の模倣者であつたか否かの問題は、非常に興味ある問題で、これは支那古代史家の研究に委ねて、余の意見を述べないが、地理的の比較から云へば、差當り「ボルブル」河は正に涓水に匹敵し、「クーヒラフマツト」の山は驪山であり「アバダーナ」は阿房宮に相當する。阿房宮は、果して支那の學者の云ふ如く、「大なる房室」の意味であつたか、又、「アバダーナ」の音譯であつたかは、一に識者の研究に委ねるとしても、埃及や「アッシリア」「バビロニア」に系統を引く「ベルセボリス」に於ける「石造建築や彫刻の方法は、少くとも、遠く印度又は支那へ東漸したことが考へられる。

七、「メガステネース」の國籍

「アレキサンダー」大王の部將の一人であり、又、その「マケドニア」帝國瓦解後、「セリウシッド」(Seleucide)王朝の高祖と仰がれた「セリウコス・ニカトル」(Seleukos Nikator)……戰勝者の「セリウコス」は、西曆紀元前三百年頃、「メガステネース」(Megasthenes)を使者として當時印度に於ける孔雀王朝、即ち「マウルヤ」(Maurya)王朝の「サンドロコトス」(Sandrokottos)；即ち、skt. Candragupta) 王の宮廷に派遣せしめてゐる。その「メガステネース」自身が記した印度見聞録は泯滅して今日傳はらないが、これから蒐録されたと見る可き、「アリアン」等の書籍から見ると、當時「サンドロコトス」の首都「パリオボトラ」(Paliobutra)；即ち、skt. Pataliputra)の宮殿が、木造であつたことが明白である。然るに、この「サンドロコトス」王、即ち、「チャンドラグプタ」王より二代目の阿育王(阿輸迦王)(Asoka)時代には、餘程「イラン」文化の影響を受けたと見え、石造の宮殿建築が起つてゐる。印度の石造建築が印度獨特のものであると云ふ人もあるが、木造時代から約百年程の後に、特殊の技術を

要する石造の大建築が急に初つてゐたことを見ると、其の文獻の有無に關らず、余は茲に、「バビロニア」「アッシリア」乃至、希臘・埃及の文化を吸收した「イラーン」民族の學術技藝の輸入に想到せざるを得ない。孔雀王朝前後の時代に繁榮した「タクシヤシラー」(Taxashira: 石切場、采石所の意。希臘史家の所謂「Asia」) 一帶の印度西北部の都邑は、謂はば、「イラーン」文化の印度に於ける足場と云ふことが出来る。例へば、佛在世の當時、頻婆沙羅王の庶子であつたと云はるゝ耆婆仙人が、醫術を學んだ地は此の地方である。又、阿育王が、父頻頭沙羅王の勅により、征伐の任に膺つた地方は此の地方である。又、當時印度で「ヤバナ」(Yavana) 或は「ヨーナ」(Yona) と云つても、文字通り「イオニア」人のみを指すものと解することは不可で、印度人から云へば、皆西方の外來人の意味であつて、就中、西方古代文化の繼承者たる「イラーン」民族を指したものである。「アケメニード」王朝前後に、波斯より東方印度に至る間の土地には、西方文化が光被した結果、西方殊に希臘の文字、又は言語風俗は、

此等の土地に國を建てた王朝に採用せられて、殆んど在來の文化を壓倒した形迹が見える。阿育王が摩羯陀の朝廷に用ひた文字の中にも、明かに希臘文字から採用したと見る可き文字がある。又、「セリウコス・ニカトル」が摩羯陀の朝廷に使節として派遣した「メガステネース」の名にしても、彼が果して希臘人であつたか否かは疑問で、彼は以前「アラコホシア」(Arachosia) の方伯「シビルチオス」(Silythos) に仕へてゐた波斯人で希臘風の名を冒したものと自分には思はれる。其の理由は、第一に、彼の遺した當時の摩羯陀地方の見聞記の内容は、希臘人と云はんよりも、波斯人より見た好奇心の發露と見る可き點が多い。第二には、彼が「セリウコス」の使者として前後十ヶ年の間「チャンドラグプタ」王の朝廷に滞在したのを見れば、彼が政治的手腕を有して居た外に、東洋風の宮廷生活に通曉して居たものに相異なく、自由不羈で「アレキサンダー」大王にすら臣下の禮を執ることを屑しとしなかつた希臘精神の人間では、到底長年月に亙るかゝる使節の任には適せざることが判る。第三には、當時の

「チャンドラグプタ」大王が、未だ王位に即かざりし以前、「アレキサンダー」大王が、北西印度侵入の當時、其の陣營に赴いて大王と面會した際に、大王は其の態度の不遜なるを怒つて、これを斬らんとしたが、潛かに逃れて再舉を謀り、大王の印度退却後、大王の冊立した「ボロス」を殺して王位に登つた次第であるから、素より希臘人に對して、好意のある可き筈がない。「セリウコス・ニカトール」は、恐らく重要なる使者として、嘗ては「アラロホシア」の方伯に任へ、印度の地理人情に通じ、北方印度語に近い國語を操る「メガステネース」を選んだことは、彼が希臘人であるよりも、波斯人である資格が適切である。

(Seleucus) transiit deinde in Indiam fecit, quae post mortem Alexandri, veluti cervicibus iugo servitutis excusso, praefectos eius occiderat. Auctor libertatis Sandrocottus fuerat sed titulum libertatis post victoriam in servitum verterat siquidem occupato regno, populum, quem ab externa dominatione vindicaverat, ipse servitio praebebat. Fuit hic quidem humilii generis natus, sed ad regni potestatem majestate nimis impulsus. Quippe quam prociacitate sua Alexandrum regem offenderisset,

「スルセゴリス」及「ヌーサ」

interfeci a rege jussus salutem pedum celeritate quaesierit. Ex qua fatigatione, quam somno captus jaceret, los ingentis formae ad dormientem accessit sudoremque profluentem lingua ei detersit, expergefactumque blande reliquit. Hoc prodigio primum ad spem regni impulsus, contractis latronibus, Indos ad novitatem regni sollicitavit. Moliendi deinde bellum adversus praefectos Alexandri, elephantis feris infinitae magnitudinis vitro se obtulit, et veluti domina mansuetudine, cum tergo excepit, duxque belli, et praefator insignis fuit, sic acquisito regno, Sandrocottus ea tempestate, qua Seleucus futura magnitudinis fundamenta jaciebat, Indiam possidebat: cum quo, facta pacificatione, Seleucus, compositisque in Oriente rebus, in bellum Antigoni descendit. (Justin. XXV)

「セリウクス」はかくて印度に赴きぬ。印度は、歴山大王の逝去の後、恰も臣従の轡を其の項より振り落せし如く、王の任命せる守牧を殺害し終りき。此の自由獨立の業をなせし人は、「サンドロコツス」なりき。されど彼は、戦勝の後、自由獨立の旗幟を變じて、臣従の旗幟となし舉りぬ。かくて、王位に即けるのち、曠野外人の羈轡より救ひし民衆を、自ら臣従の境遇に陥れき。彼「サンドロコツス」は、實に卑賤の種族に生れしも、神明の威力によりて、王者の權勢を押しす、められしものなり。其の昔、歴山大王は、かれの無禮を怒り、彼を死刑に處せんと命ぜし時、彼は兩脚の速力に任せて逃れて、生命の安

企を求めけり。これが爲め疲労して、睡寢に襲はれて地に臥しける時、巨大なる獅子は眠れる彼の傍に近づき、流れ出でける汗を、彼の爲めに、舌にて拭ひ淨め、彼目覺めたる時、親しげに彼を置き去りけり。この神異の出来事によりて、彼は始めて、王者の位に上らんと望を起し、群盜を結束して、國家の革新を印度の民衆に訴へてけり。かくて、歴山大王の任命せる守牧に對し、兵を起しけるとき、いと巨大なる野生の象は招かずして來り、恰も馴養の恩愛に報いんとするもの如く、かれを背に載せて、自ら戦の先頭に立ちて、軍を率ゐ、又勇悍なる戰鬪者となりき。かくの如くして、彼「サンドロコトス」は、王位に即きて印度を領有せり。時恰も「セリウタス」は、將に來らんとする偉業の基礎を造築せる時なりしかば、彼と平和條約を締結して東方の事靜安に歸したれば、自ら「アンテコス」と戦はんと決心せり。

第四には、彼の「メガステネース」(Megasthenes)の名は希臘風に解釋すれば、「大なる力を有するもの」と云ふ意味であるが、波斯人としての名は、恐らく「Alagastama」(マガの勢力を有するもの)、又は「Fegastama」(神の勢力を有するもの)に近い「イラーン」風の名であつたことと思はれる。何れにしても拜火教徒の名らしきものであつたことは疑なく、史家「アリアン」が、かの「ネアルコ

ス」(Nearchos)と、この「メガステネース」の兩人を「信用の置ける人間」(eox'ia x'oge)と批評してゐるのは、彼が身口意の三業の制約に忠實であつた拜火教徒であつたことを、説明して餘りあると思ふ。

八、西方文化と「マハーブ

ハーラタ」の叙事詩

次に、印度の大叙事詩「マハーブハーラタ」(Mahabharata)の「アーデ・バルヴン」(Ādi Parvan 初卷)第二百一十八章に左の如き詩がある。

...tatstavan mayah nana lakṣakṣya nīve, antī,

vipradravanti sahasā dadat a madhusudanāi

...vijāya dhanavandānī mayah vāi cīpānī varanū.

(かくて、「マドフスーダナ」は、「タクシヤカ」の住宅より急ぎ走りつゝある「マヤ」と名くる阿修羅を見た。彼が「ダーナ」族の、又實に、工人中の最勝なる「マヤ」なりと知りて、...。註。梵語中、「タクシヤカの住宅」とあるは、「工人又は匠人の住宅」と譯せば、「アスラ・マヤ」の何者たるかが自ら判明する。)

又、同じく「サブハー・バルヴン」(Sabhā Parvan. 朝見の

卷)第一章]

ahaha hi vīvakarmā vāi dānavānān mahākaviḥ,

soshahā vāi tvatkarṇe karṇān kinicid iccāhānī.

(何となれば、我は伎藝天にして、實に「ダーナヅ」族の大匠なり。我は御身の爲めに何事かみなさむと欲す。)

米國人で印度政府の考古局の官吏であつた「スポーナ」(Spoonar)氏は、「バータリプトラ」の發掘をなして草

した注意すべき論文「The Zoroastrian Period of Indian History」(J. R. A. S. 1915)に於て、上記の文中にある「Kavi」の語を「ゾロアスター」教の術語メックニと註し、上文の全體を「For I am the creator, the great Kavi of the Danavas」として、「Vīvakarmā」を造物主として譯して居るが、これは感服出來ない。又、同氏は單に「Kavi」の語をその原語のまま掲げて義譯を附加してゐないのは海に懶巧な遣方である。余は是を譯して、「匠」又は「賢なもの」とする。元來、此の「Kavi」の語は、梵文學に於いて、「賢者」又は「職業的詩人」、或ひは、「宮廷詩人」と云ふ意味に解せられ、畢竟「文藝上の賢者」のみに限られて居るやうであるが、これだけでは、その意味が狹隘に過

「ヘルセポリス」と「スーサ」

ぎ、時ありて古文學の解釋上、晦澁を生ずる嫌がある。

「Kavi」の語は、一方、文學の範圍のみならず、他方、工藝技巧の上に秀いでた者を指すことは、梵文學上屢々見る處で、一例を舉ぐれば、印度「シヤカ」曆紀元後五百五十六年、乃ち、西曆紀元後六百三十四年の「Athole」の碑銘の文に、

yenkyoji naves ma-sihram artha-widhan virekima jina-ve ma
sa vijayatan rav-karṇij kavitar-ria-Kāhidsa-Bhāra-vi-karṇij ॥

(かれ、「ラギキールテイ」日種)は、利用厚生の道に通曉せるものなるが、新しき様式にて、岩の如く堅牢なる世尊勝者の宮は、かの賢者によりて建てられき。かれ、これによりて「カギイ」の位を得たる「カーリダーサ」「プハラーギイ」と併しき榮稱を有するものとなれり。かれに勝利せられ。)

此の碑銘は「カーリダーサ」や、「プハラーギイ」の生存年代の最低限を示すものとして有名なものであるが、從來、西洋又は印度の學者が譯した文を見ると、甚だ感服出來ない。此の詩の意味から推すと、「マクニ」とは、梵語でも「賢者」又は「詩人」のみならず、「工匠の巧なるもの」にも解す可きもので、畢竟する所、英語ならば「artist」又

は「arisan」に當る可きものである。勝者、即ち世尊の殿堂を建てた工匠が、「カーリダーサ」や「プハーラギイ」の如き詩人、即ち狹義の「カギイ」に比して名聲を伴にする^{と云ふことは建築家なども中世印度に於て「カギイ」と云はれたに非んば、到底此の詩は意味をなさない。一言を以てこれを掩へば、梵語の「kavi」は梵語の「daksā」(巧み)と同一義である。故に「カギイ」の語の解釋について前掲の「マハーブハーラタ」の「mahākavi」の語は「大いに巧なるもの」「最も巧なるもの」と解す可きである。「カギイ」の前にある「danavanam」の「dāva」は梵文學では阿修羅と同義に用ひ、古代印度の神話では、九類の主「ブラヂヤールバライ」(prajāpati)の子、「ダクシヤ」(Dakṣ)の女、「ダヌ」(Danu)と「カシヤバ」(Kasyapa)仙人との間に生れた子供達であるとしてあるが、是は「ダーナヴ」族の名稱から遡源して、「Danu」と云ふ名祖又は職祖(eponym)を作つたもので、「マナーヴ」(Manava)族の名より「マヌ」を作り、「カーシヤバ」族より「カシヤバ」と云ふ名祖又は職祖を作つたのと同一軌である。}

九、所謂、「ダーナヴ」族名稱の起源

「ダーナヴ」族の名稱の起源は、單にこれを古代印度の神話のみに求む可きではなく、寧ろ、これを埃及希臘關係の神話に求む可きであると余は思考する。「ホームロス」の叙事詩中には、「ダナオス」又は「ダナウス」(Danaos; Danaos)の子孫「ダナイ」(Danai)と云へば、希臘人中當時の文化の最も進歩して居つた「アルゴス」(Argos)國人とする^{こともあり、又、全希臘人とすることもある。これは荷も「ホームロス」の叙事詩を読んだ人は否定出来ない事實である。思ふに、「vicvakanna」、即ち技藝天が「アルヂュナ」(Arjuna)に對して、「マハーブハーラタ」中の「サブハーバルヴン」の第一章に「余は實にダーナヴ族の最も賢なるものなり。」と云ひ、又「ダーナヴ」族の諸々の宮殿を作れりと云ふことを常識的に解釋せんには、「ダーナヴ」族を以て、「(raeo-Persian)族、又は「(raeo-Egyptian)族として、西北印度に移住せる工匠の階級を指せるものと見る可きであり、「vicvakanna」は其の工匠の祖}

神と考ふ可きである。支那古代に於て、公輸、魯班が工匠の祖神であるのと同様で、「スプーナー」氏の云ふ如く、造物主などと譯すのは不適當である。

又同じく、「アスミ・マヤ」の、記事については、第一章(十四—十七)に、

danavānāṁ purā pūrjā prastāḥ hi mayā bhaktiḥ ||
raṁyāni sukhaḡarbhāni bhogādhyāni sahasra abh-
udhāni ca raṁyāni sarāṁsi vivādhāni ca ||
vicitrāni ca vāstrāni kāmāgāni rābhāni ca |
nagartpi vicitrāni sātīpṛtīkaraṁvanti ca ||
vāhanāni ca mukhyāni vicitrāni sahasraḡarbhā |
vāhani raṁyāni sukhaḡarbhāni vāi bhīyaṁ ||
ete bhakti mayā sarve.....

「プリトハ」妃の子(アルヂユナ)よ。余は「ダーナヴ」族の諸々の宮殿を造れり。千々に歡樂に富める安居の家々も亦然り。又その庭園は樂しく、又池はその種類多し。衣服は多彩にして、車は意の儘に行く。城は廣敞にして、其の城壁に尖塔聳え、其の乘輿は最上にして千々に美し。其の穴倉は數多く、樂しく又安らかなり。是ら一切は我によりて造られたり。」

とあり、印度に於て、石造大建築が「アスラ・マヤ」、又

「ヘルセボリス」と「スーサ」

説は非常に古いものである。「スプーナー」氏は其の同じ論文に於て、古代印度に於ける「イラーン」文化の影響を實證的に論じて居るが、彼は「Asua Maya」を「Ah-ura Mazda」に對比せしめてゐる。「y」音を摩羯陀地方特有の發音「j」としたら、「zda」を「ya」としたとて何等の不思議はない。「ヘルセボリス」の「クセルセス」帝の「アバダーナ」殿の碑文、

Vasht Auramazdaha inam hadi's adan akumavm.
(梵語的に書更じれば、vasuntsuramnyasodani sctojanmakuravm. 「アフラマズダ」の大神の恩寵によりて我はこの宮居を造れり。)

は、非常にその間相通ぜることを知らしめる。又「マハーバラータ」の「アスラ・マヤ」が、自ら「viryakarna」(伎藝天……種々の伎藝あるもの)と云つてゐるが、然し、その「viryakarna」の支那音譯は毘首羯磨(新譯は毘濕縛羯磨)であつて、伎藝天と義譯してあるが、この毘首羯磨が諸工人の神であることは注意す可きことで、奈良の古寺に此の天の作と稱せらるる佛像もあり、嵯峨清涼寺の釋迦佛が毘首羯磨の作であるとの傳説は、誰人も知る

第二十二卷 第三號 五九五

所である。「パータリプトラ」の宮殿が鬼神によりて造られたと云ふ記事は、法顯傳、及び大唐西域記の波吒釐弗咀羅の記事を参照すれば自ら明白である。殊に法顯傳の巴連弗邑ハルヘン、是阿育王所治城アユウキョウ、城中王宮殿、皆使鬼神作シテ。累タガヒ石起シテ牆ヲ。閻文刻鏤。非ニ世所ニ造。云云

又、大唐西域記が、阿輸迦王の治下に起つた波吒釐弗咀羅の造營の記事も、隨處に鬼神の業として、伽藍佛像を擧げて居ることを見る。此等の書に鬼神とあるのは、即ち梵語の「asura」の譯であつて、古代波斯語の「ahura」に相當することは云ふ迄もない。要するに、金字塔ピラミッドを埃及に建て、「ミノス」の宮殿を「クリート」島に建て、「アガメムノーン」の宮殿を「アルゴス」に建て、又「ベルセボリス」に「アケメニード」王朝の諸帝王の爲めに宮殿を建てた石工の伎術的子孫が、「ダーナヅ」族として、「パータリプトラ」に於て、將た印度の北西部に於て、宮闕造營に參加したことが、「マハーブハーラタ」の詩人によつて歌はれて居ると云ふ事が明瞭になりさへすれば、余の本懐である。

十、「スーサ」の古都

余は、以上の旅行見學を訖つて、引返して「テヘラーン」に歸り、滞在約七ヶ月の後、歸朝の期も迫つたから、その翌年、即ち昭和十年六月二十七日、首都「テヘラーン」を退去し、「コム」(Qum)、「シムルタナバード」(Simuratabad)、「ブルデルド」(Bairid)、「ホラマバード」(Khorramabad)、「アフワズ」(Ahvaz)より、「マホメラ」(Muharamlah)港に出で、更に「バスマ」(Basa)に至り、茲に便船を得て、印度孟買を經由して歸朝したのであるが、その途中、「イラーン」高原から「メソポタミア」の平原に下り、「ヂズフル」(Dizful)より、現在は廢道になつてゐるが、古の「スーサ」(Susa)、今日の「シェーシュ」(Sus)の廢墟を訪ふ機會を得た。「イラーン」高原と異り、平原は暑熱燒くが如く、其の中を廢車同様の自動車自動車を備ひ、「カラーン」(Karan)河に渡してある薩珊王朝時代の煉瓦の大橋を見、約四十軒の間、稀に見る惡道を走り、「スーサ」の廢墟に到着した。

「スーサ」は昔時の「スーシアナ」(Susiana)の首都で、「スーシアナ」の地名は、畢竟首府「スーサ」の名稱に「*Susa*」と云ふ希臘語の土地を示す接尾語をつけたのに外ならない。「スーシアナ」は、北は昔時の「メデア」に境を接し、東は「ファルス」、即ち波斯本部と隣り、南は波斯灣に至り、西は「バビロン」の國に接攘してゐる。地勢は概して北に高く、南に至るに従ひ漸次陵夷し、廣敞なる平野を展開して居るが、「ティグリス」河の下流の東、波斯灣の北に當つて、「*Chosroes*」河と「*Euharis*」河とが貫流して居る東北部の山嶽地方は、昔時「エラム」(*Elam*)と云つた地方で、舊約全書の以士喇書、新約全書の使徒行傳などの所謂、「エラマイ」人或ひは「エラム」人の棲息した邦域である。「エラム」は高地の義であるから、「エラム」人とは、南方低地の民族から呼んだ高原の人、山嶽地帯の人と云ふ義となる譯である。この「エラム」民族は必しも「セミティック」民族ばかりから出来て居るのではなく、「セミティック」民族に先立ちて、文化を此の地方に開いた「アッカド」(*Akkad*)族や「スメル」(*Summer*)族と「セミテ

「ヘルセボリス」と「スーサ」]

ック」民族と混合した民族の名稱である。此の民族は西曆紀元前二千二百八十年頃、「バビロン」を陥れ、國を建てたもので、自國を「アンザン」(*Anzan*)と呼んだ。「エラム」とは畢竟「セミティック」語に外ならない。随つて其の民族の言語は、「セミティック」語系と「アッカディア」語系と混合したもので、「アッカディア」語は、全く「セミティック」語とは關係のない獨立の語系の言語であることは、今日學者の一致する處である。「エラム」民族の發祥地たる都府は「スーサ」であつて、「スーサ」は必しも波斯建國の祖たる「ク羅斯」を俟つて出来た都府でない。「ク羅斯」が「メデア」と同盟して「バビロン」を陥れたのは、其の以前一千七百年前、「エラム」人が「バビロン」を陥れた故智に倣つたものである。故に、最初から「スーシアナ」地方の民族は、「アケメニード」王朝には容易に服従し臣屬せず、波斯帝國の盛時に於ても、波斯の主權に服従したのは、南方平坦の部分で、北方山岳地方は眞に難治であり、强悍なる民族が思ひ思ひに部落をなして、酋長の下に獨立して居つた。今日に於ても、同地方に住む

第二十二卷 第三號 五九七

「バフトリアリ」(Bactiani)族、「ルリ」(Luri)族、又は「クルデー」(Kurdi)族は、現イラン政府にとりて難治の民族であつて、波斯政府の中央集權に仲々屈服しない。これは恰も印度の盛時に於ける克什米兒國や巔賓國地方の如きものであつて、又歐洲の瑞西國の如きものであつた。故に、古代波斯帝國の帝王は常に「スーサ」と「ベルセボリス」との間に介在する民族に、賄幣を贈りて慰撫し、征戰の時には傭兵とし、平時には、兩都の通商交通の保護に任せしめたことは、恰も今日、英國が印度と「カーブル」(Kabul)との通商に、兩國の間に介在する「バターン」(Bathan)族を利用して居るのと同じである。「スーシアナ」地方には、古代から「スーサ」の都のみならず、「セリウコス・ニカトール」の名に因つた「セリウシイ」(Selenct)又は「アザラ」(Azara)等の都市がある。何れも、希臘羅馬の史家、又は地理學者には知られて居るが、中にも、「スーサ」は、「アレキサンダー」大王の遠征以前から、希臘の史書に於てのみならず、舊約全書中の「以士帖」(Eshet)の物語で有名である。以士帖書は舊約全書では、尼希米

聖記と約百記との間に介在してゐるが、此の物語に「シユシヤンの城」(Shushan)とあるのは、即ち、「スーサ」を指したものである。

「スーサ」は前述の「スーシアナ」、即ち、今日の「フヂスタン」(Khuzistan)の平原に在る。北を望めば、雲煙模糊の中に、遙かに黛のやうな山岳地帯を認め得る計りである。唯、この「スーサ」には低い丘陵が四つあり、西北には、「シャフル」(Shahr)河と云ふ河幅約十米の川が流れ、丘と川との間に部落がある。村の中央、河岸近く、「サポール」大帝の墳墓と稱せらるる回教寺院があつて、白色の他と異つた圓錐形の屋根が唯一の裝飾である程に、淋しい村である。土語は「アラビア」語の方言で、土人は「イラク」の土人に似て、女は鼻に寶石をはめてゐる。人相は全く「イラン」人と相違してゐる。四つの丘の中、その西部にある丘の上には、今日では城塞のやうな建造物が立つて居るが、是の丘は希臘人の所謂「メムノニオン」(Memnonion)で、嘗て、「アレキサンダー」大王が、四萬タレントの金貨や財寶を得たのは、こゝである。

Ἀἰκάνδος ἐκ Σιωνταν ὑπεύθυνος τραπεζίτης ἐν τοῖς βασιλικοῖς
τραπεζαῖσις ἐὰν ἀπὸ πωλητῶν. τῆς ἐκ τῶν βασιλικῶν καὶ
βασιλικῶν ἀδελφῶν. (Pillarich: Alexander XXXVII)

(自ら「スーサ」の主となり、「アレキサンダー」は、宮殿に於て
貨幣四万「タレント」と、其の外、調度及び財貨とを所有する
に到れり。)

「ダリウス」二世及び、「アルタクセルセス」二世の宮殿
は北方の丘にある。巴里「ループル」博物館所藏の「ド・モ
ルガン」(de Morgan) 氏の「スーサ」の發掘物を見た自分
には、現地「スーサ」に於て、殆んど見る可きもののない
のに驚いた。唯見えるものは、四つの丘と、地下十米二
十米と深く掘下けた跡だけであつた。「スーサ」は「アケ
メニード」王朝の發祥地とも見る可き「アンザン」であり、
この地の方言であつた「アンザン」語、或ひは「エラム」語
は、同王朝時代に於て、古代波斯語及び「バビロニア」語
と相並んで重ぜられたことは、「ベヒスタン」や「ヘルセボ
リス」等の碑文に三體の並存してゐるのを見ても了解す
ることが出来る。有名な「ハムラビ」(KHAMMURABI)
の法典の出たのは北方の丘であり、「バビロン」風の黄・青

「メルセボリス」と「スーサ」

の彩色煉瓦は村の東南から發掘せられたものである。

佛人「シエール」(Schell) 氏の業績になる「スーサ」出土
の碑文に就いて見るのに、「ベヒスタン」や「ヘルセボリ
ス」等に見えない新語彙或ひは方言を知ると同時に、所
謂「スーサ」の地名が初めて出てゐる。古代波斯文で「ス
ーサ」の文字のあるのは現在では是だけである。

十一、「スーサ」の地名の起源

「スーサ」とは何を意味するかは興味ある問題で、今迄
何人も其の地名の意味を説明したものはないが、余は茲
に一説を提出する。同じ「スーシアナ」の都府である「ア
ザラ」などは「セミティック」語系の名稱であるから、「スー
サ」も同様であることは疑ない。恐らく「ヘブライ」語の
「Susa」又は「アラビア」語の「سوسة」と云へる植物が、
此の地に多かつたことから、其の植物の名を採つて、地
名としたものではないかと思ふ。「Sus-an」又は「su-san」
は、普通百合科の植物としてゐるが、恐らくは此れは俗
稱であつて、英語で云ふ「sallow」又は佛語で云ふ

「saranca」(茜草)、或ひは英語で云々「Eastard sallow」など幾多の染料用植物が含有せるものと見る可きである。又、舊約全書中「ダビデ」王の物語にある美人の名、「スーザンヌ」は即ち此の植物の名を冒したものである。「スーサ」の地方は昔から紅藍で有名な所で、「アレキサンダー」大王が「スーサ」占領の時、五千「タレント」の重量ある「パープル」(purple)を見出し、既に百九十年間貯藏せられ居りしも、何ら變色せざりしことを述べてゐる。貝より採取せる「フェニキア」産の「パープル」としての染料ならば、動物質のものであるから、百九十年も變色しないと考へられない。定めし「スーサ」占領當時の「パープル」は植物質のものであつたと思はれる。又、實際に、古代に於て「パープル」は深紅色である。

十二、「スーサ」出土の碑文

「スーサ」出土の碑文で注意す可きことは、「ダリウス」一世が皇帝に立ちし時、「バルチア」の長官たりし彼の父「ヒスタスプス」(Histaspes; Vistaspā)や、祖父「マルサ

メス」(Aršames; Aršāna)が尙存命であつた事である。

...vāšnā Auramazdāta hya manā pīdā Vistaspā utā Aršama
hya manā apanyāka...ubā agivēd(pan yady Auramazdā mān
xštyvdyān akemauš ahyāyā bunīyā...

〔「アフラマズダ」の大神が、余をこの國土の王となせし時、「アフラマズダ」の大神の恩寵によりて、我が父キイシユターズバ」と祖父「アルシャーマ」とは、二人とも存命せり。〕

又、出土の碑文によりて、「スーサ」の宮殿の建築用の材料を知ることが出来る。例へば、宮殿造營の木材は、「ガンドーラ」(Gandara)及び「カラマニア」(Karamāna)の櫟材(yaka)、或は「ラブナン」(Labnāna)の杉材(nauāna)があつたこと。木製の門・戸・窓等は美麗に裝飾され、「スパルタ」(Sparda)や「バクトリヤ」(Baxtriya)産の黄金(daran-tyan)、埃及(Mudriya)の銀・銅・青銅等の金屬を用ひたこと。「モザイク」の材料には「ソグディアナ」(Suguda)の瑠璃(Kaputka)や藍紋石(sibaka)、¹⁾「クハラスミア」(Uvāra-zamra)の赤銅鑲(axsina)や「エチオピア」(Kussa)、²⁾「イハム」(Hindava)、³⁾「マロロキミア」(Harauvatya)産の象

牙 (Nins) を用ひたことが判つて、當時の宮殿が如何に善美を盡したものであつたかを知ることが出来る。又、此等の産物を、支那周末に出来たと云はるゝ禹貢などに見えて居る産物と比較して、如何に古代支那が貧弱の國であつたかが判明する。而して「スーサ」の宮殿造營に従事した民族は、先づ第一に、「バビロニア」人と「イオニア」人とが煉瓦の仕事に従事し、第二に、「メデア」人と「エヂプト」人とが、宮殿の内部外部の裝飾に任じたこと等が判る。これらの諸條件は、引いて「ベルセポリス」の宮殿造營にもある程度迄考へ得るであらう。

十三、「ミスラ」教

次に「スーサ」出土の「アルタクセルセス」二世 (ムネネン) (B.C. 404-359) の碑文に、

Auramazda utā Miθra nām pātuv hačā vispā jastā...

〔「アフラマズダ」と「ミスラ」の二柱の神が我を一切の摩礙より守護せよかし。〕

又、「ベルセポリス」の碑文には、

Mām Auramazdā utā Miθra baga pātuv utā imām dahyvm

「マルセポリス」と「スーサ」

utā bā nām karitā.

〔「アフラマズダ」の大神及び「ミスラ」の神は、我が造りなせし此の國土及び我を守護せよかし。〕

とあるが、「ミスラ」の神名が、古代波斯の碑文に於て公然と書かれ、「ゾロアスター」教の大神「アフラマズダ」と肩を並べて、帝王の祈願信仰の對象となつたことを證明するには、この「アルタクセルセス」王の碑文を以て始めとする。「ダリウス」帝や「クセルセス」帝の碑文には、「ミスラ」の神名が見當らぬ。「ミスラ」の名は、「アエスタ」聖典中、「Mithr Yasht」の中に、天上の光の神として、輝ける天宮、廣き牧場の主、眞實と信仰の神として讃へられて居るが、印度の梨俱吠陀では「Mitra」として「Varuna」の神と屢々並び稱せられてゐる。太陽神であることは共通である。たゞこれのみでなく、武の神、勝利の神として、羅馬の帝政時代には「sol invictus」(無能勝の太陽神)として、羅馬の武人の間に信仰が深く、且つ普遍的であつた。この土俗信仰が、「ゾロアスター」教中に攝取せられたのは、餘程、基督教の出現以前の事と思はれるが、「アルタクセルセス」帝時代には、宮廷の中に於ても大いに

尊信せられて居つたことは、前記の碑文を見ても明白である。「アレキサンダー」大王が、波斯地方の方伯に任命した「フリサオルテース」の父、「レオミトレース」(Rheomithres) の名を見ても、「フリギア」(Phrygia) 一帯の土地の女神「Rhea」と、「イラーン」民族の崇敬する「Miora」とを以て其の名としてゐたことは、本論文第四節、歴山大王と「ベルセポリス」の宮殿を参照せられたい。安息王朝時代には極盛にあつたと見え、帝王の名にも、Mithradates (B.C. 174-136) (「ミトラ」によりて與へられたるもの) があり、又「ポンツス」(Pontus) 「カバドキア」(Cappadocia) 或ひは「アルメニア」(Armenia) には、その名に「ミトラデーテス」、又は「ミスラ」を冠する名を附したものが、屢々見える。この「ミスラ」信仰は、羅馬の勢力が「イラーン」の勢力と接觸するに及び、羅馬の軍隊の將士の間にも相當普及する結果となり、羅馬に基督教が入つて、その勢力を確立する迄、少からざる社會的勢力を得るやうになつた。又、「コンスタンチヌス」大帝も、「ミスラ」教の盛んであつた羅馬の植民地であつた「Dacia」州の

「ネイスス」(Nessus) に生れ、其の幼時は、埃及や近東で送つたから、「ミスラ」教の如何を知つて居たに違ひない。この羅馬帝國に於ける「ミスラ」教の思想は、後代に至り、東は支那より、「アジア」大陸、地中海の彼方、西方「アトランチック」の海岸迄勢力を有し、聖「アウガスチヌス」も嘗ては其の信者であつた摩尼教の「イラーン」的なる思想の下地となつたものである。この「ミスライズム」は種々の點で基督教にも影響を與へてゐることは興味あることである。

十四、「ミスラ」教と基督降誕日

基督降誕の日は、西方教會派の新舊兩教では、十二月二十五日となつてゐるが、東方教會派の希臘正教では一月六日である。「ゾロアスター」教の曆では、「ミスラ」の月是一年の第七番目の月で、現在の波斯曆では新年 (Zartan; Sog. NW SRD) は春分三月二十一日が正月元旦であるから、「ミスラ」(メヘル) の月は太陽曆の九月二十一日から十月二十日の間に當る。然るに、上古の「ゾロア

スター」教の暦は、夏至六月二十一日が歳首である。魏書西域傳波斯國の條には、「以六月爲歲首」とあるが、これは眞實で、現在の波斯暦の新年が三月彼岸に變更されたのは、「セルデューク」(Seljuq)の名主、「ジェラルル・エジン・マラク・シャー」(Jalal Edin Malik Shah)の西暦紀元一千〇七十九年以來のことである。故に夏至六月二十一日を新年とすれば、第七である「ミスラ」の月は、冬至十二月二十一日から翌年一月二十日に亙る期間である。又、現在の「ゾロアスター」教の祭日に「メヘルの月のメヘルの日」、即ち「メヘルの月の第十六番目の日」があるが、その日は今日希臘正教の基督降誕の日と全く同一の日である。やはり、東方教會派に大いに關係ある中世の「アルメニア」基督教では、「Mehakan」と云へば、基督降誕日(christmas)を指すが、「Mehakan」自身は、「イラーン」の「Miorakāna」であつて、即ち「ミスラ」の祭日の意味である。乃ち、「ミスラ」の誕生日である。この日より、太陽が次第に生長し、日が長くなることを指すのである。尤も、(イ)の「Miorakāna」よりの出た近代波斯語の「Mehajan」

は秋の彼岸を指すが、これは上述の如き春分を歳首とした結果の暦日上の差違に過ぎない。摩尼教が、支那に傳播した七曜の中、日曜日(ソグド)語の蜜(Hitt)と云ひ又佛教の宿曜經中、曜森勿を胡語蜜又は密と云ひ、引いては我が御堂關白藤原道長の具注暦の蜜日は、共に「ミスラ」の日の事であることは人の知る所である。かくの如く、上古に於て、太陽神教であり、従つて一神教であつた「ミスラ」信仰が、その點に於て一脈相通する基督教の中に合體し、又、基督教が在來の土俗信仰である當時勢力の普遍的であつた「ミスライズム」の流れに乗つて、遂にはそれに乗り移つたことを何人も否定することは出来ない。しかし、茲に切に讀者の注意を催したき事は、余の所謂、基督教とは、耶蘇出世以前、已に猶太民族の間に存在し流布して居つた「メシヤニズム」の思想と、希臘文化に光被せられた東方民族の基督思想とを混融した教を指し、「ナザレ」の郷に大工約瑟の子として生れた耶蘇の教とは別物であると云ふ事である。

十五、「アナーヒタ」女神教

又同じく、「スーサ」出土の「アルタクセルセス」二世の碑文には、かの「ミスラ」の神と相並んで、「アナーヒタ」(Anahita; Avzras; Anahis)女神の名が出てゐる。又「ハマダン」(Hamadan) 出土の碑文にもある。

imām apādāna vašnā Auramazdāna Anahitahyā utā Nitrahya
akunā mān

「アフラマズダ」の大神、及び「アナーヒタ」女神、及び「ミトラ」の神の恩恵によりて我はこの「アバダーナ」殿を造れり。この「アナーヒタ」信仰も、「ミスラ」信仰と共に廣く「イラン」に行はれ、宮廷の信仰の對象となつたのは殆んど同時代と見ることが出来る。「アナーヒタ」は、元來五穀等を質らす水の女神で、その神徳は「アエスタ」經典中「Ardvisūr Yašt」の中に述べられてゐる。元來、「イラン」に於ける土俗信仰であつて、その起源地は、「バビロニア」とも云ひ、「アルメニア」とも云ひ、又は小亞細亞であるとも云ふが、古代に於て、「ポンツス」や「カバドキア」地方には多くの「アナーヒタ」女神の殿堂があつた。

特に、「アルメニア」に於ては、この女神の信仰甚だ熾烈で、「ユーフラテス」河上流の「Aktisene」地方は、古來「アナーヒタ」の國土(Anaetia regio—Pliny. V. 83)と云はれ、その「Erez」には大殿堂があり、宗教的の「Exogamy」が盛んに行はれた。安息王朝時代には、「ミスラ」信仰と共に極盛を極め、その殿堂は小亞細亞より「イラン」にかけ、到る處に建てられた。現波斯「ケルマンシャー」と「ハマダン」との中間にある「カンガブル」(Kangavar: 古代の Concohar)は、安息王朝時代、當時世界第一の「アナーヒタ」殿堂があつたが、今日は僅かにその遺跡を止めてゐる。安息王朝時代の地理學者で、「Ptolemaios」(「バルティアの驛程」の著者「Isidore de Charax」は、この殿堂を「Diana」の殿堂と云つてゐるが「アナーヒタ」が西方に於て、「バルシアのアルテミス」(Ἀρτεμις Περσική)又は「ヘルシアのディアナ」(Diana Persica)と稱せられたのを見れば尤もと云はなければならぬ。今日「イラン」地方に於いて、「dahitar」(Skt. dahiatar; Gk. Ouz-tis)を付せる地名を屢々見るが、是らは皆、上古に於て、

「アナーヒタ」女神信仰に縁故のあつた土地である。「シリア」等に中世以前に行はれた「アドニス」(Adonis)信仰に關係せる「prostitutions sacrees」の習慣も、又は、印度に於ける突伽 (Durga) 女神、吉祥天 (Crīdevī)、又は辨才天 (Sarasvatī) などの崇拜も、その淵源は、遠く「アナーヒタ」女神の信仰にあつたと信ずる。此等は、宗教學史上、非常に興味ある問題であるが、その研究は後日を期したい。

かくて、余は烈日炎天の下、故都廢墟の殘壘の間を右往左往して、茫々上下二千五百年に亙る邦家の興亡、人文發達の歴史を懷ひ、波斯帝國の盛時を想像しつゝ、低徊去るに忍びなかつたが、多年、支那や印度の文化の徑路につき、鬱積して居て辨らすことの出来なかつた幾多の疑念が、茲に漸く幾分解決するの曙光を認め得た心地して、非常に爽快なる氣分を以て、波斯に於ける最後の見學地を退去した。